

## 師への手紙

（一九八四年一月十三日 金曜日）

第二十七回生 稲賀繁美

先生、

御多忙の中、ていねいなお手紙有難く存じました。これから一年半はたいへんなご多忙かと存じますが、平常心もお仕事にあたって下さることを、衷心よりお願い申し上げます。大仕事がかたごととポックリいってしまふ、よくある日本の辞書編集者の最期よりは、BからCまでやって亡くなってしまふフランス式個人偏執の辞書昨りの方が先生らしいわけで、今回の仕事がいかに大業といえども、先生にとっては、峠から峠に至る山路の中のひとつの標程にすぎぬものであって欲しいと念じて居ります。しょせん日本人的な学問の良さは、一種の隠やかな諦観のうちに、つまらぬ日常に浸ると見せかけながら、かえってその弛緩の内に即物と理知との弁証法を生きる——フランス流に申せばヌエ的で、はしにも棒にもかからぬ機会主義者のレットテルを貼られるでしょうが——にあるのではないのでしょうか。先生のそういう境地を

こわいものみたさで遙かに望んでいる末端の一読者としては、肩ひじ張ってがんばっている先生が見えなくなってしまうのも悲しいとともに、上に述べたようなたおやかさの中の師の姿も夢想したくなるものです。フヌケになつた秀才はさえないかもしれませんが、それでも東洋的な——とうとうこんな大難把な形容詞が平然と口をつ

いて出るようになりました——至誠の境なのではないでしょうか。なま悟りなことを申し上げてみましたのも、つくづく明日はないという諦念の下に毎日を、それゆえ無理せず、期限をつくらず、しかし誠実に生きて、いつ死んでもかまわぬ歩みをつづける他に、「常」としての理想はないような気がしてきましたが、そんな澄んだ気持ちを取り取る頃にはたいいてい酒がバック一箱（これが一リットルと知ってこのあいだ驚きました）空になった頃合ですから、これでは救われません。

行政面での工面さえつけば、今までパリで調べて書き捨てにしてしまったもので、なんとか仕事のかっこうはつきそうだという目算はあるものの、どたん場でのパリの非効率と、それに良くも悪しくも慣れてしまつて、巨大な制度の織りなす記録の山から、ほんのひと筋をひっぺがして寄せ蒐めて喜んでいるにすぎぬ自分の業に気付

いて、改めて愕然とするにつけ、こんな小なる目的をあと一年でやつつけようとするだけで、夜も目が冴えて寝られず、翌日体調を崩したり、つまらぬあせりで一人部屋に居て手に汗握っている自分にふと気付く度に、やれこれでは血圧もあがるし体に良いわけないなあ、なんて思いつつ、こんなことしたためてる次第です。

完全主義者というのは集約的農耕民の悪い習性なのでしようが、それゆえに抜け出せず、調べれば調べるほど泥沼化する研究は、早く足を洗って次なる対象に転進しようとおせればあせるほど、やっかいな問題をつむぎ出し、書きかけのたつたタイプで三十枚ほどの原稿に今や四十頁の註がつき、これがいつまでたつても態をなさず、昨つては崩される砂山さながらで、さすがに根負けしうになつてきたのは我ながらなげないことです。自分の製造したものが自分の手に余るような肥大を起こすわけ、いかにも人間らしい偉大と悲惨だ、と本人は妙な悦に入っているのですが、今ごろになって、こんな相手と心中してもらつては困る、という先生のお言葉が身に浸みますが、他人の書いたものについては、この点に関する限り、どんな大先生のものにもケチがつけうる反面、自分のやつてることも、あつけなくひっくり返されるの

を承知の上でうなっているのでは、健康に良いはずなく、この種の歴史研究というものの悪魔的吸引力に、あらがいつつも魅せられてしまった因果に、ふと戦慄を感じます。

最近古参の日本人留学生諸兄姉がすべからく大学都市をあとにしてしまい、急激な平均年齢降下とともに新参日本人と口をきくこともほとんどなくなりましたが、それでも、パリのあちこちに散ってしまっただけ先輩たちに、質問すれば圧倒されるほどの示唆を与えてくれる勉強家のそろっているのは、その層の厚さと質の良さに、改めて有難く思っている昨今です。それにつけてもこんな優秀な人たちの業績が、第三博士号を与えるというだけの実に形式的な処遇でもって葬り去られてしまっただけという機構に改めてむかつ腹の立つこのごろです。領域破りをやると、意思疎通不能なばかりか、すぐケンカざたになり、新参者いじめや村八分的現象の横行するパリの研究者組織の政治的いやらしさに、当地の指導主任が亡くなるとたんにさらされはじめ、改めて亡き師の特例的な寛大さ、容量の大きさにおそまきながら気付いたところです。いわずもがなですが、学問というのはしよせんゲームであって、それに参加する以上、規則

盲目的に精神主義者を気取っている無知な人反インテレクチュアリズムを主張する一般学生たちにも辟易し、およそ誰とも議論する気になれず、すっかり人間嫌いになりました。こういう環境でこそ、実存主義も花ひらいたのだとつくづく思うのですが、これを言って同意してくれたフランス人は皆無。とたんにわけのわからぬ敵意を十人が十人むき出しにし始めるのには、正直申しまして嫌悪感を催します。

彼らの主張が筋の通ったものならばとにかく、こっちが何を言ってもノンの連発で、あげくは先方の最後に言ったことと、最初に言ったこととの矛盾のあることを指摘せざるを得なくなるのですが、ここまで参りますと例外的に食卓に招かれたりするような、一年に何度とない席の上でも、あとはシラジラとして、ケンカ別れ同然になるのは申すまでもないところで、今では交際しきものは皆無になりました。改めて亡き師の包容力の偉大さに打たれているところです。

師の死のあとしばらくは、死を予期していたこともあって（不謹慎ながら、そう思ってたのは彼のまわりで小生ぐらいのものようです）平然としていたものの、やがてじわじわと、一個の教授の死というものが、彼個人

は守らねばならず、どの種のゲームを選ぶかは実に実存主義的な選択であって、一体ひとつのゲームを選んだからには、他のゲームがどんなにおもしろくても、首をつっこんだり、理解を示したりしてはならない。日本のお目出度き仏文学者様方のすぐ便乗して得意顔になる新造語症候群は、どんなに完璧に使いこなしても、パリでは日本人がやっているとという事実ゆえに拒絶される。この種の病気に感染して浸っている患者の内輪で使用するのでない限り、マルクス主義であれ、記号学であれ、分析であり、示唆するのみで――その教祖の名を口端にのぼせたが最期――ハチノスになるのだからたまりません。小生もともとこれらの教祖にやられた連中の内で、あらかじめ無批判に通用する彼ら流のパラダイムを器用にあやつて、満足する気は毛頭ありませんけれど、反対に、CHRSをはじめとする機関で既に、常に業績をあげている若い研究者が（たいていは頭がハゲてますが）自分たちのとっている立場がいかに恣意的であるかを自覚しようともせずに、ひどく政治的な（それゆえ彼ら自身は客観的と信ずる）発言を教条的かつ権威的に押しつけてくるのには、否、むき出しにしてつかかってくるのには、すっかり嫌になりました。その反動で何も読まずに、

としての重みはさておき、網の目としての社会の中で、いかに大きな縫い目のほころびを現出せしめるかを目のあたりにするにおよんで、今ごろになって言葉を失っている有様です。

enfinと aberrant とを連発していた亡き師の最期の一年の影の苦勞も、彼の目に見えぬ庇護がなくなつて、世間の風になかにせめさいなまれるようになって、はじめて忍ぶことが出来るようになりました。こうした晩年の師のやるせなさを知るにつけ、ようやく平安に満たされた故人はやはり幸せになれたのだとは思ってみるのですが、それでも残された者には、少々練り言の多すぎる文明史家的相貌を呈していたと言えなくもないこの詩人の最後の年の講義録を読み返すにつけ、まだまだ知的にはそれこそ代替不可能な地位と役割りとを充分に果しているままに、現役で思いの他早く我々をあとにしてしまったこの人物への、何とも表現し難いもったいなさ、喪失感を、感じざるを得ぬところです。

学者としては、数年前の野心も厳密さも失ってしまったあとの故人との、先方の多忙と、小生のいかにも日本人的な他人の都合に配慮し過ぎる性向ゆえに、あまりに表面的でしかなかった二年足らずのつきあいでしたが、

それでも一個の人物に出会えたという実感は否定すべくもないところで、改めてこの縁を結んで下さった先生に感謝申し上げねばならぬところです。

パリに來たての當時、下手で難解な *expose* を書いた後で、日本人の諸先輩から、お前は良い先生にめぐりあえて幸せだ、とお世辞でなく言われたことが今さらながら思い出されますが、とまれ美談たり得る一生を送った故人、短すぎる人生とは申せ、それだけの密度を額にきざんでいたのは否定できぬところです。実を申せば新聞に享年六十一歳とあるのを見て改めて驚いたところで、秋山光和先生との面会のあとで、同い年なのでおどろいたなどと言っていた故人が、既にサバを呼んでいたのにならって初めて気付いた次第です。

先生には、お前は彼に対してオイディプス・コンプレックスをいだいているなどと指摘された小生ですが、象徴の父に死なれ、エレクトラに逃げられて、果たしてこの先どうなるものやら。飲酒酩酊妄言乱筆多謝、草々。